

## いわゆる『儒醫』についての考察——初探

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

儒醫とは儒学の教養を素に医学を習得した医師を指し、漢籍医書を理解するには儒学が不可欠であったこともあり、現代の我々にとってはどの儒醫も孔子の説いた哲学を持つ人格者である姿が浮かぶ。しかし江戸時代の前期、京都古義堂の伊藤仁斎（1627～1705）は「儒は大人の事、醫は小人の事」と唱え「醫であって儒に志すのは良い。だが、儒にかこつけて醫を施すことは許されない」とした。懐徳堂の学頭三宅石庵が学問を教えながら売薬をし（多くの儒者は薬草の知識を持っていた）、かなりの収入を得ていたのを見て、同塾の五井蘭洲（1697～1762）は「老子（石庵）の学は宗旨なし。売薬を以て業となし喜んで医を談ず。俗にこれを目して鶴（ヌエ）学という」と記した。鶴とは鳥とも獣ともつかぬ得体の知れぬ生き物の事を指し、純粋な儒学者たちが医師が学問を利用して金銭を得ていることを糾弾したのであり、彼らにとっての「儒醫」とは尊敬どころか侮蔑に値する呼び名であった。

徳川治世における儒学の採用は幕府の始祖徳川家康が藤原惺窩（セイカ）（1561～1619）を登用したことに始まるが、家康自身は儒教の教養を封建制の擁護と倫理教育に利用し、宗教として発展させる意欲はなかった。京五山の禅僧であった惺窩が禅宗の教養の中にあつた儒教儒学を独自に体系化し弟子の林羅山がこれを実践して幕府の官学（朱子学）に仕立て上げたという経過がある。以後各地の寺子屋から藩校までの儒学教育の累積は享保九年（1724）の大坂懐徳堂（町民の活力）、寛政四年（1792）江戸昌平坂学問所（官学としての朱子学の確立）が設立されたことで一応のピークを迎える。古来の仏教医学から儒教教育による医学への影響は、未だこの時期専門教育とは言えず「塾の人気取りのための医術」の域を出なかった。大坂では貧困の儒学生が怪しげな施薬施術をして鬻鬻を買ったりした。徳川封建制度に醫師の国家資格はなく、庶民層では何時も怪しげな儒醫がはびこることとなった。

その一方、儒学という学問の深淵を探るべく、宗教としての儒教に没入して醫人としての立場を究めようとする一派もいた。河内国瓜破村の舟木杏庵、大田村の桑野喜庵、川辺村の竹島浩庵、久宝寺村の安田春益そして東郷村の田中祐庵（彌性園七代元允）らである。彼らは18世紀の半ばからの凡そ約一世紀を互いにネットワークを巡らし、医学の研修を差し置いて、宋詩の朗詠に耽るといった極めて高度な教養に浸ったりした。

田中彌性園に遺る儒学儒教の遺産には医学との関連において、各代の儒医が如何に悩み、反芻し、そして昭和まで継続させたかを物語る物証が未調査のまま遺されている。

物証の連なる期間を三分して第一期が「儒教への没入期」第二期『『彌性園方函』の完成まで』そして第三期が「幕末の混迷から儒醫の終末期」とする。完結まで数年を要する見込み。

今回は八代田中元緝（1767～1825）が父元允（1728～96）の死に際して家宗を仏教浄土宗から儒教に転換した時点から、元緝が儒醫として成長するまでの、特に儒教への変身ぶりを追う。この作業で最も困難なのが今以て難解な儒教摂理の理解と文書の解説である。山中浩之、小曾戸洋、町泉寿郎ら諸氏による古文書解説も多くなされたが、儒教関係の細部については手つかずのままである。意欲ある学究の調査が希求されるが此処では映像を示す。